

第11章

体験理解の創出

ここまで第7・8章の二つの事例研究を通して、実践者だからこそ為し得る実践研究のあり方を示してきた。場の実感と繋がった間主観的な実感の感受に基づくエピソード記述による体験理解と、ビデオ記録のコーディング分析に基づく比較研究を行なうことで、二つの異なる研究方法を示すとともに、それぞれの研究の視点と研究方法の特性を論じてきた。また、二つの事後検証を通して、4ヶ月間の実践者（筆者）の変容のプロセスや、観察者視点の変容を明らかにし、体験理解の考え方を深める視点を示してきた。こうしたワークショップの体験理解は、一回毎のワークショップ実践における研究であると同時に、実践を積み重ねる中で継続的に積み重なっていく多声的で重層的な実践者にとっての意味生成の営みでもあった。こうした過程の中で実践を捉える視点が深まっていくことも明らかになった。

本章ではここまでの知見を踏まえ、「子どものワークショップの体験理解」のための、新たな視点を生み出す議論を深めていきたい。

1. 間主観的な実感に根差したワークショップ体験の把握と理解

本研究では、関与観察において実践者が間主観的に把握した実感とその vitality affect の感受によって、参加者との間に実感に根差したワークショップの体験を捉えることができた。例えば、7章で述べたノブヨシの「こんなに汚れたの初めて！」という言葉と表情の持つ力動感の感受は、それまでは危険としか感じなかった感受認識を大きく変化させた。愉しきの情

動の力動感に突き動かされるミナエやハルナの姿も、単に楽しそうという認識ではなく、強い情動の力動感によって身体が突き動かされてしまうほどに嬉しいのだということを間主観的な実感を基に捉えることができた。それら二つの出来事での「たのしさ」の接面に接続されてからは、筆者の立ち位置（視点）は大きく変わり、参加者との情動の接面での体験に、ワークショップ体験のアクチュアリティがあると考えに至った。これは依って立つパラダイムの変位でもあり、筆者も関与観察と数ヶ月間の実践を通して、こうしたパラダイムの変位という変容を体験するに至った。

こうした間主観的な実感に根差した体験の把握とは、恣意的な主観的把握として批判されるべきものとは異なるものであった。本研究が採用したエピソード記述は、こうした間主観的に把握した実感と事実の継時的な記述構造によって、体験のあるがままを描き出し、メタ観察による省察を加えることで、体験理解の解釈に対して読み手にも了解されるような明証性を示してきた。こうした記述的な体験理解の明証性についてはエフランド (Efland, 2002) も真偽ではなく真実らしさによって確かめうるものとしたように、エピソード記述などの主観性や間主観性を軸にした研究は、こうした方法によって恣意的な主観的把握に陥ることを注意深く回避することができる。

加えて本研究ではビデオカメラの記録から作成したトランスクリプトを、時系列上のユニットに分けて、全ての場面でのコーディング分析を併用した。そこから産出された体験理解のための概念とそれが出現する時系列上の位置は、抽出したエピソードとも重なっていた。こうした二つの研究方法の比較検討によって、客観的で網羅的なデータ分析が生み出す概念と体験構造の理解に対して、関与観察者の間主観的な実感に基づくエピソード記述の考察は、その目的に対して十分な了解可能性と明証性を持つものであることが示された。仮説の一般的妥当性を量的手法によって検証することが適した研究ではないならば、未知なる領域（フィールド）についての新たな体験理解を生み出す仮説生成と意味生成の方法としては、臨床的实践における重要な方法であり考え方であることが支持されたと考えてよい。

2. 間主観的な vitality affect の感受によって捉えた体験の内容

次に、こうした方法によって捉えたワークショップ体験とはどのような体験なのか、ということについては、まずは参加者との間に生成され、間主観的に感受認識される体験と、体験を捉えようとする実践者や観察者の体験を捉える視点という、二つの論点がある。

(1) 間主観的な vitality affect の感受によって捉えられた体験

まず、間主観的な vitality affect の感受によって捉えられた体験であるが、こうした視点でワークショップ体験を捉えるということは、ワークショップの中で生起するコミュニケーションを目的的な理性的コミュニケーションだけで捉えて理解することではない。むしろ、一見するとそのワークショップの目的に合致しているとは思えないような、目的外の行為や情動の交わり合いといった、間主観的に感受される感性的コミュニケーションにおいても体験を捉えていくということである。それによって同じ体験事象でも感受認識が大きく変わってくることを、子どもたちとの事例は示している。

このように、間主観的に vitality affect を感受することによって捉えられる体験とは、場の中で接面を共にすることによって感受される相手（メンバー）の内的実感としての体験であり、それが間主観的にこちらにも同じように通底してくるということでは、共にある体験（Stern, 1989）を生きている動態を捉えていると言える。このように、間主観的な vitality affect の感受によって捉えられた体験とは、ワークショップ体験の「感性的位相」なのである。

(2) 企画者や実践者等の関与観察者の体験を捉える視点

もう一つ重要なのが、体験を捉えようとする実践者（観察者）の体験を捉える視点であった。事例で示してきたように、間主観的に感受される vitality affect の実感によって捉えられる体験とは、決して恣意的な把握ではなかった。また、それは必ずしも予め設定したワークショップの目的やねらいを捉えるために分析視点に照らして抽出した体験でもなかった。むしろ